

私の一文字「根」

副代表幹事
政策懇談会 委員長
日本の明日を考える研究会 委員長
金丸 恭文

フューチャー
取締役会長兼社長 グループCEO



見えない「根」が企業の成長を支える

4月号から始まった、会員が選んだ「一文字」に書家の岡西佑奈さんが命を吹き込む新企画。第3回は金丸恭文副代表幹事です。

金丸 実は私も幼少の頃に書道教室に通ったことがあるんです。いたずらがひどくて、すぐにクビになりましたけど。だから今回の企画はとても楽しみにしていました。岡西さんはなぜ書道を始めたのですか。

岡西 入学した小学校が、通っていた幼稚園から離れていたの、母が幼稚園の友達に通う書道教室に通わせてくれたのがきっかけです。7歳でした。

金丸 今回いろいろ考えて「根」という文字を選んだんですが、不真面目にはなれない漢字ですよ。

岡西 「根」を選ばれた理由を教えてくださいませんか？

金丸 私はこれまで流されないようにビジネスをしてきました。「流されない」とは根がしっかりしていること。私たちの仕事は企業のルーツを遡り、歴史を紐解きながら未来を見据えた上で新しい時代にふさわしい経営戦略を立て、効率よく実行できるメカニズムを設計し提供することなので、「根」は自分のビジネスにもふさわしいと考えました。

生き方にしろ、会社の歴史にしろ、損得で動いた足跡はビューティフルではないと思うんですよ。私がかかりたいのは、時代の変化があっても陳腐化しない生き様です。これは流行に左右されないということでもあります。

岡西 すてきですね。「根」という漢字は、偏は大地を覆う木の形で、^{つくり}旁は人の「目」の象徴です。目が動かない、止ま

ることから木の止まる場所である「根」を意味するようになりました。大地に根を張るどっしりとした木は、私の中で改革者というイメージでした。それで、今回下の部分をグッと太く重く、どっしりと構えているイメージで書かせていただきました。

金丸 なるほど。ここの払いの部分ですね。書道もこういう書だと人の個性や思いが出て面白いですね。文字の掠れた部分はわざとなんですか。

岡西 はい。墨を付け足さずにどんどん掠れてほしいな、というイメージで書き進めていきました。掠れによって力強さが出るので。今回は30枚ちょっとで書き上げました。

金丸 「根」には時間が含まれていますよね。だって、植物の始まりは「種」じゃないですか。そこから芽が出て成長して木となり根を張っていく。樹齢千年以上の屋久島の縄文杉の根をセンサーで見たらどこまで伸びているのか。

岡西 きっと驚くほど伸びていそうですね。

金丸 根は会社のカルチャーです。就業規則やマニュアルなど、文章にしないものの価値を創り出すものが根だと思うんです。実は私が会社を作ったときに、自分で木の絵を描いたんですが、これは「企業の成長は個人が生き生きとすること」ということを象徴した絵なんです。根がワーッと広がって、枝があり、実がなっている。そこに夢や希望、情熱や挑戦を書き入れました。これが企業の成長の栄養素だと。企業の栄養素とはそういうものなんです。

木が根から栄養を吸収して成長していくには、成果がまだ目に見えていないときにリスクを取って挑戦しなければならない。見えているのは地上の木ですが、見えないところ、「根」の方が大切ではないかと思うんですよ。



書家
岡西 佑奈

1985年3月生まれ。23歳で書家として活動を始め、国内外受賞歴多数。現代アート『青曲一そして始まりとしての紅畝』を展開。